

爽やかな秋晴れの空のもと、連休祝日の9日、閑散とする虎ノ門のウイズ街で、続々と参加者が来場したニッショーホール(日本消防会館)で開催されたのは、深刻な状況にある日本の精神障害者の分野に対して、鋭い問題提起を投げかける大熊一夫氏が中心になって準備してきた研究集会「日本の Matto の町をどうする!」。全国各地から600名ほどが集い、熱心に参加した。



午前10時から、この日のために大熊一夫氏が日本の関係者をインタビューすると共に、イタリアのトリエステでの取材によりバザーリアの足跡と成果を伝える100分ほどの新作ドキュメンタリー『精神病院のない社会』の初上映!

[夏前に取材を進め、9月中旬から大熊氏がトリエステに在住のカメラマンの所に出向き進めていた編集・仕上げの作業が、完成間近の直前にPCトラブルで中断!大熊氏の帰国後の数日間では映像の修復と仕上げを突貫作業で行ない、上映2日前、日本にデータ送信して間に合った!!]

日本の精神医療の60年余の歴史の問題点を分析すべく、「措置入院」させられた人の証言、1970年の『ボ・精神病棟』取材の秘話、宇都宮病院事件と大和川病院事件(大阪)を事例とする現実と精神科病院を巡る状況、そしてトリエステのボなど、40時間以上の取材映像から、「第1部」として



まとめられたもので、今回の映画のテーマは「監獄型治療施設はいらない!」である。



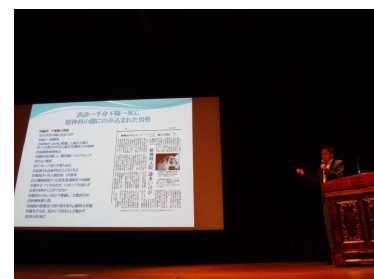
午後1時から、「強制入院の不条理」という絞り込んだテーマでのシンポジウム。パネラーに5名の専門家を迎え、始めに各々が提起の発言を行なった。大熊一夫さんは記録映画を踏まえて「精神病院の怖さは昔も今も変わらない」と指摘。当事者であり、原発事故の避難ゆえに入院生活から解放された時男さん(元「双葉病院」長期入院患者)が「60歳からの青春」を喜んではいけない」という思いをリアルな生活の様子を込めて吐露。長谷川利夫杏林大学教授が「ニューズランド青年身体拘束死は語る」と題して、一連の事件の実態と報道の状況を伝えた。増田一也どかりの里常務理事は「隔離収容型の精神病院の終焉を!」という視点で、



地域で暮らし権利を回復させている人々の様子を具体的に報告し、確実な展望につなげる方向を提示した。メディアの立場から、佐藤光展・読売新聞記者が「石郷岡病院事件は日本の精神病院問題の象徴である」と説明すると同時に「オープン・ダイアログ」という視点の取組みの重要性を、報道する側の考え

として語った。

その後、司会の藤井克徳日本障害者協議会代表と伊藤順一郎クリニック「しっぽふぁーれ」代表による進行のもとで、ディスカッションを開始。その先頭には、強制入院で数十年の人生を奪われた後に「やどかりの里」で自分の生活を取り戻した星さんがゲスト発言、また、途中では、参加者の1人として、大熊氏の精神病棟の潜入取材にかつて協力した鈴木氏が、今も続く現実を批判する発言を行なった。



シンポジストと司会の面々が対面しての討論の後、参加者に呼びかけられた「ひとこと発言」には十数名が挙手して会場マイクの前に並び、当事者、家族、医師、医療福祉スタッフなど様々な立場から、心情の込められた言葉を発信した。



最後のまとめ発言では、大熊氏は現実を変えていく方策の1つとして、現場からのリアルな「内部告発」を呼びかけ、社会を動かしていく必要性を強調した。藤井氏は、今の現実「差別の再生産や増幅が続いている」一面もあるけれど、関わる人々が「集う」ことでエネルギーを培っていくことこそ、運動を構築していく土台になるはず、と提起し、糸賀一雄氏の「気づいた人が動こう!」という言葉の思い起こして取組みの輪を広げていこうと訴えた。